

聖書：ローマ 1：16～17

説教題：神の義

日時：2015年3月22日

パウロはローマの教会に自己紹介を兼ねて、この手紙を書いています。パウロの願いはローマのクリスチャンたちと会い、彼らの教会から送り出されて、さらなる西方伝道、スペインまでの伝道へと遣わされることです。その働きを共にするために必要なことは福音における一致です。そこでパウロは神から委ねられた福音について、この手紙の中で組織的・体系的に書こうとしています。すでにこの手紙の差出人、宛先人、初めの祈りが記され、前回はローマ人に関する感謝と、彼らのことをいつも思い、祈っている自分であるとのあかしがなされました。そして今日の16～17節の言葉に到達します。この二つの節は、多くの注解書にもそう記されていますが、この手紙の主題が述べられている部分です。すなわちこの手紙のテーマ聖句と言って良い御言葉です。また私たちプロテスタント教会にとっても特別な御言葉です。ルターの宗教改革は1章17節の言葉から始まりました。17節の「神の義」の意味の再発見によってキリスト教のとらえ方が全く変わったのです。そのような重要な真理がギュッと詰まった箇所を注意深く見てまいりたいと思います。

まず16節でパウロは「私は福音を恥とは思いません。」と語り出します。なぜ彼はこんな言い方をしたのでしょうか。それはやはり多くの人が福音を恥とする現実があったからでしょう。ローマのクリスチャンたちもそうであったかもしれない。いや私たちもです。私たちは果たして「私はクリスチャンです！」と自分の住む地域、職場、学校で大きな声で言えるのでしょうか。教会にいる時は大声で賛美をし、恥ずかしいという気持ちは一切持ちません。しかし教会堂を出て、普段の生活場所に戻ると、クリスチャンであると知られるのが恥ずかしいと思う誘惑を受ける。なぜそうなのでしょう。それは世の人々の評価に異常に心奪われるからでしょう。人々が私をどう思うかがとても気になり、できればおかしな人と思われたくない。世の人々は確かに、私たちがちょっと変わった人だと見るでしょう。なぜそうなのかを突き詰めていくと、それはイエス様の低さと関係すると思います。もしイエス様がみんなから賞賛され、高い評価を受ける方だったら、その方を素晴らしいと言う私たちを誰もおかしな人とは思わないでしょう。しかしイエス様はあまり見栄えがしません。もっと言えば少し格好悪い。貧しい家畜小屋で誕生し、田舎のナザレで育ち、30歳からの公生涯で一時的に世の期待を集めました。結局はのろいと辱しめの十字架刑につけられ、殺され

た。あんな人を私は信じると言い、この方こそ全世界の救い主、神の御子だと言ったら、人々から「この人は頭が大丈夫だろうか」と思われるのも納得はできます。そしてそのような世の反応に接すると、私たちが世と一緒にあってキリストを恥じるようにと誘惑されるのです。一番弟子のペテロでさえそうでした。イエス様が捕らえられて、「おまえもあの仲間ではないのか」と問われた時、ペテロは「私はあの人と何の関係もない」と言いました。誰でも他の人からさげすまれたくありません。そのため、世がイエス様をさげすむのを見ると、私たちがイエス様を恥じるようにとの誘惑にさらされるのです。しかし間違っていないのは、イエス様はなぜそんな姿になられたのかということです。どうしてそんなに格好が悪いのかということです。それは他ならぬ私たちのためです。私たちが負うべき苦しみと辱しめをイエス様が代わりに受けて下さった。なのにあれは格好悪い！私はあの人と関係を持ちたくない！などといった態度を取るなら、それは恐るべき恩知らずな態度と言わなければなりません。

パウロは1コリント1章23節で、キリスト教の福音は「ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚か」と言っています。彼は同胞ユダヤ人からも迫害されましたし、異邦人世界でも、例えば哲学の中心地アテネで福音を語った時も、人々から「このおしゃべりは何を言うつもりなのか」と批判され、途中まで聞いていた人々もばかばかしいとあざ笑いながら「またいつか聞くことにしよう」と言って去って行きました。これから帝国の中心地ローマに乗り込むなら、益々多くの人々から似たような評価と軽蔑を受けることになるでしょう。しかし彼は「私は福音を恥とはしません！」と言います。どうしてそう言えたのか。それは彼が福音とは何かについての理解をしっかりと持っていたからです。同じように私たちが、福音とは何かという理解をしっかりと持つことによって、人を恐れずこれを宣べ伝えて行く者へ導かれるのです。

まずパウロは、この福音は「神の力」だと言っています。全能なる神の力ですから、それは私たちの思いをはるかに超える偉大な力です。その力はどこに現われるのでしょうか。それは「信じるすべての人の救い」においてです。「すべての人」の強調のために、パウロは「ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも」と付け加えています。その人々にもたらす「救い」とはどんな救いでしょうか。私たちは色々な救いを考えるかもしれませんが、ここで述べられている救いは、この書を見て行く中で分かりますように、私たちが神の栄光にあずかるようになることまでを含みます。あらゆる苦難、悩み、問題から解放されることはもちろん、神ご自身の栄光をこの身に映し出す状態にまで導かれることを意味します。もしそうなら、どうしてこの福音を私たちは恥じるべきでしょうか。むしろ大いに誇って、この素晴らしさを知らないでいる多くの人に、こ

れを伝える使命に生きるべきではないでしょうか。

ではなぜ福音はこのような祝福を、信じるすべての人にもたらすことができるのでしょうか。17節前半:「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。」ここに「神の義」という言葉が出て来ます。この「神の義」とは何でしょうか。普通にこれを読むと、私たちは「神が義であること」「神の義なるご性質」を意味していると思うかもしれませんが。しかしそうだとしたら、これは私たちへのグッド・ニュースにはなりません。先に触れたルターがそうでした。彼はローマ書を研究した時、この「神の義」をどう理解したら良いか、悩みました。彼にとっても、この言葉は最初、「神の義なるご性質」のことを言っていると思われる。しかしそれなら、どうしてこれが福音でしょうか。神が正しければ正しいほど、逆に浮き彫りにされるのは、その正しさからは程遠い人間の罪の現実です。神の義が語られれば語られるほど、私たちは益々救われ得ない自分を確信するだけです。ルターは何とかこの神の義に達しようと難行苦行を試みますが、努力すればするほど、救いは自分から遠のいていく。そして心の底では達成不可能な義を要求する神に憎しみさえ覚えていたと後に述懐しています。しかし彼はそのような魂の苦闘と聖書研究を通して、この「神の義」は単なる神の正しさのことではないと理解し始めます。この義は罪人をさばき、断罪する神の義ではなく、罪人を救うために神が罪人に与えてくださる義である、と。3章21～22節:「しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」すなわちこの「神の義」は、キリストを信じる「信仰による神の義」であって、すべての信じるに人に「与えられる義」とあります。私たちをさばく義ではなく、私たちを救うために神が私たちに「プレゼントして下さる義」なのです。

私たちにとって一番の問題は、義なる神の前に立つことはできないということです。聖なる神は悪にふさわしいさばきを下さなければなりません。しかしそれだと私たちはやがて滅びに至ります。今はまだあわれみによってさばきが延期されていますが、やがて一人一人が死後によみがえらされて、神の前でさばかれると言われています。しかしここにグッド・ニュースがあります。すなわち神がそんな私たちにプレゼントして下さるところの完全な義が差し出されている。そして誰でもこれを受け取ることができる。神はどのようにしてこの「神の義」を用意して下さったのでしょうか。それは御子イエス・キリストを通してです。御子は人となって、私たちの代わりに完

全に神の律法を満たす歩みを地上でささげられました。御子がわざわざ律法の下に身を置いて、完全な歩みをする必要などありませんでしたが、御子は私たちの代わりに人となってその歩みを全うされました。そして私たちの罪を引き受けて、十字架上でさばきを受けてくださいました。私たちの罪に対する精算はそこでなされたのです。従ってもう律法が私たちに請求できるものは何もない。こうして神はイエス・キリストにおいて、罪人を義とする「神の義」を用意してくださったのです。

ではこの「神の義」は、どうやったら私たちのものになるのでしょうか。それはただ信仰によるというのが聖書のメッセージです。新改訳で「信仰に始まり、信仰に進ませる」と訳されている部分には多くの解釈があります。ある人はこれは信仰には小さな信仰から大きな信仰への発展があるという意味に取ります。またある人は、これはある人の信仰から他の人への信仰へ、例えば説教者の信仰から聞き手の信仰へと、次々に伝染・拡大していくという意味に取ります。またある人はこれは旧約の信仰から新約のより豊かな信仰へという意味に理解します。他にもいくつかの解釈があります。その中で良いと思われるのは新共同訳聖書の訳です。「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」同じ理解が新改訳の欄外に別訳として示されています。「その義はただ信仰による」。神が私たちに求めているのは、ただ信仰だけです。信仰+何かの行ないではありません。私たちは自分の行ないを加えることによって、自分はこの祝福を受けるに十分なことをしたと思いたいのですが、私たちには神に認められるような行ないは何らできません。なすこと、話すこと、心に思うことのすべてに罪のしみがあって、神に受け入れられるものにはならないのです。私たちに必要なことは、ただ自分の罪の現実と霊的無能力を告白して、神が備えてくださった十分な「神の義」を感謝して受け取ることです。「私はこれからはこのあなたの義に頼って歩みます。どうか恵みによって導いてください。」と祈ることです。その信仰を通して神は神の義を私たちに与えてくださり、私たちは神との正しい関係、生きた交わりの関係に生かして頂くことができるのです。

パウロは最後に旧約聖書からの御言葉を引用します。ハバクク書 2 章 4 節の「義人は信仰によって生きる」という御言葉です。これもまた欄外の 17 に注がありますように別訳の可能性もあります。すなわち「信仰による義人は生きる」という訳です。文法的にはどちらも可能ですが、こちらの方が意味深いと思います。こちらの方が信仰によって義とされるというメッセージを良く表せるからです。またそのように信仰によって義とされた者は「生きる！」と語っていることとなります。すなわち信仰によって義とされた人は神との正しい関係から来る満ち満ちた命、あらゆる祝福に満ちた

命に生きるということです。

今日の御言葉から考えたいことは、私たちと神との関係はどうかということです。私たちは今すぐ義なる神の前に立てる者でしょうか。やがて私たちは一人一人、神の前で地上の歩みについて調べられます。その日は私たちが死ぬことによって、あるいはキリストの再臨の日が来ることによって、突然今日臨むかもしれません。私たちはその準備ができているでしょうか。しかしここに素晴らしいメッセージがあります！神が私たちを救うために、あわれんでくださり、旧約から啓示してくださり、ついに備えてくださった「神の義」があります。これはユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、信じるすべての人に差し出されています。私たちはこれを感謝して受け取るだけで、神の前に義なる者と見なされるのです。そしてそこから「その人は生きる！」と表現されるいのちの祝福が始まって行く。私たちはこの福音のメッセージを心から感謝して受け取りたい。人間には一生かかっても到達し得ない義を神は用意してくださいました。私たちはこの神の義に信頼して神との正しい関係に、そして「信仰による義人は生きる！」というやがての栄光につながるいのちの祝福に歩ませていただく者でありたいと思います。